英先生の追想

政治学科の超弩級教授、林毅陸、板倉卓造、及川恒忠の三先生の流れを汲む長老教授、英修道先生が昨年初秋に逝かれた。昨年は早春に伊藤政寛先生、初冬には今泉孝太郎先生が逝かれて、明治生れの法学部スタッフには、津田利治先生が鎌倉で御健在であるのみになった。戦前の古きよき時代の大学教授の威信を備えた英先生今や亡く、明治は遥か遠くになりにけりの感が深い。

英先生は生粋の三田育ちで、幼稚舎から大学まで塾に学ばれたので、慶應色が骨の髄までしみこんでいた学者であった。国際法学会、国際政治学会の重鎮で、帝国大学、殊に東大の学者の独壇場の観があった学会（現在数え切れないほどある学会も、戦時中までは極めて少く、国際関係では国際法学会だけ）では、執行部に会計主任として英先生の御名前があったのを覚えているが、先生は夙に私学の代表格で活躍していらした。因みに国際法学会の理事長は、歴代帝大出身であったが、私学出で最初に理事長に就任したのは、前原光雄先生であり、国際政治学会の第二代理事長は英先生であった。理事会で神川初代理事長から次の理事長に英先生をと指名されたとき、「お引受けします」と力強くいわれたのを思い出す。

ところで、法学研究に載せられる以上には、先生の業績に言及すべきであろうが、これは松本三郎、池井優という実に優秀な後継者がおられるので、その方に譲ることにして、私は個人的に感じたことだけを少し述べて責めをふさぎたいと思う。松本、池井両教授がえらいと思うのは、お二人が英先生のきびしい特訓に耐えられたことである。私のような圭角のある人間はとてもついて行けなかっただろうと思うのであるが、英先生によく仕えた両教授には脱帽のほかない。英先生のしつけのきびしさはさぞやと思うのは私だけではあるまい。しかし、今にして思うとそれは愛の鞭であった。それは私が鮮烈な体験をもっているからである。

戦争末期、同期に助手になった中村菊男君と私は、気軽に英先生を表敬訪問しようということになって、二人でふらりと雪ヶ谷の御宅を訪問した。ところが、何の予告もせずに伺ったわれわれは、門前払いをくわされたのである。長上の者を訪問するには予めアポイントメントをとってからにすべきであるということを先生はびしりと教えて下さったのである。

これは実に痛切な経験であった。学者は論文を書いたり構想をねったりしている最中に突然中断されると、全くやり直しせざるをえなくなることを後日知って、英先生の御応待によって学者のマナーを教えられたのを感謝している。しかしその後、予め御連絡してから伺ったときには、こんなにおいしいのは生まれて初めてだと思ったほど美味絶佳のコーヒーを御馳走して下さった。

次に、先生らしい言動に接したのは、もう四十年も前になるが、戦後初の塾派遣の法学部海外留学で島谷先生と御一緒に英国にいらしたときのことである。温厚そのものの島谷先生とは対照的な英先生は、まだその頃敗戦国民の肩身の狭さもあってか不愉快な経験をなさったらしく、そのトラブルについてそれは金で話がつくことだろうとプイといわれたのを覚えている。先生は人の顔色を見て人の機嫌をとるという卑屈な態度を嫌われたのである。

英先生は外交官試験委員をなさったりして外務省に関係もおありであっただけに、御令息が一昨年、駐伊大使になられたことに、どんなに御満足であったか察して余りある。先生の外交持論を御令息が実践面で生かされたのを見届けられたからである。私はその正道氏を大学院時代から知っており、英国駐在の官補時代、経済協力局長時代も知っているが、氏は優れて外交官気質を備えた英才であった。私はいま、ハロルド・ニコルソンの「外交」を繙いているが、その中に「理想的なディプロマティスト」という一章があり、そこではよき外交交渉には、〝モーラル・インフルエンス〟が基にあると指摘されている。その精神的な背景というのは、七つの外交的徳目である。その第一は、眞実で信頼されること、第二は、あいまいでなくきっぱりしていること、第三は冷静であること、第四は、明るく気立てがよいこと、第五は辛棒強いこと、第六は中庸であること、第七には忠誠の念があることである。このような資質が正道氏にはすべて備っているのにはっと気付いたのである。

父上の薫陶を受けた氏が外交官コースを順調に歩んで、ニューヨーク総領事、外務省報道官という重要ポストを立派にこなし、一流国の大使に抜擢されたことは故なしとしない。戦前の数少ない塾出身外交官の中に堀切善兵衛駐伊大使があったが、奇しくも正道氏はまたイタリア大使になられた。英大使は慶應出身外交官のホープである。よき後継に恵まれた先生、安らかにおやすみ下さい。　(一九九五・三・一三)

名誉教授　内山正熊

英　修道先生を偲んで

先生は、明治三十五年一月十七日、東京の東銀座でお生れになった。幼稚舎から大学院まで一貫して慶應義塾で学ばれ、その後恩師及川恒忠教授のお薦めで法学部に残り、以来四十年余にわたり東洋外交史、日本外交史専攻の教授として教育研究に努めてこられた。「塾に二十年間学び、その後四十年余の奉職と合わせると実に六十一年間、これ程長く塾と附合った者はそう多くないだろう」というのが先生の自慢話の一つで、それだけに内に秘めた愛塾心の強さは人並外れたものがあった。

その先生の教育方針の根幹は正に全人教育にあり、塾出身者にふさわしい高い識見と気品に富む良き社会人の育成ということに重点をおかれた。このためとくに課外活動を人間を形成し友情を育てる場として大切にされ、正課の英研究会はもとより、東京文化の会、慶應書道会、国際政経研究会、体育会軟式野球部、三田グリーンクラブといった数多くのサークルの会長を引受けられ、その会員は、「紳士淑女たるにふさわしい見識、容姿、態度の持主」となることを厳しく指導された。当時は、先生の訓戒を小々うるさく感じた学生たちも、いま集まるとそれを懐しい思い出とし、先生を師にもったことを終生の誇りとしているのが面白い。

先生の学術上の業績としては、学位取得論文となった大著「中華民国における列国の条約権益」をはじめ、「門戸開放機会均等主義」「東洋外交史」「中近東外交略史」「明治外交史」「外交史論集」「日本外交史関係文献目録」などの著書と百を超す学術論文がある。これらのうち、やや晩年の著作である「中近東外交略史」では私が、「明治外交史」では阿部光蔵元武蔵工業大学教授（故人）や池井優教授が、そして「日本外交史文献目録」では三人が共同して、先生の指示のもと資料集めなどのお手伝いに全国を駆けめぐったが、綿密な史実に裏づけられた研究成果の誕生するまでの苦労を身を以って教えられたことが懐しい。

先生は学界においても常に指導的役割を果たされ、日本国際政治学会の第二代理事長を務められたほか、国際法学会やアジア政経学会においても中枢的理事を長く務められた。昭和四十三年秋の岡山大学における年次大会で、神川彦松先生を継ぐ理事長に選ばれた夜の二次会で、大変ご機嫌な先生は

「よし今夜の勘定は全部俺が持つ」と多数の会員に振舞われ、会が大いに盛上ったことも懐しい思い出である。それから二十年余経ち、私が同学会の第十代理事長に選ばれたことをご報告に伺った折、先生には大変喜んでいただき、永年の学恩に少しは報いることが出来たかと嬉しく思った記憶がある。

先生は私にとって仲人であり、また古いことだが、留学から帰って家を求めるまでの一年間を雪ヶ谷の御自宅の離れにお世話になったこともありで、公私ともに大恩を忝なくしただけに、九十二歳の天寿を全うされたとはいえ、かけがいのない指導者を失った悲しみと寂寥には誠に堪え難いものがある。しかし、ご葬儀に先立ってお別れを申し上げに伺った折拝見した先生の大往生を思わす穏やかなご尊顔は、いかにも「吾れ送り来たりし人生に悔なし」と語っているかのごとくで、生者必滅の人生、終りは常にかくありたいと、私は心の中で深く会得するところがあった。

法学部客員教授　松本三郎

英　修道先生を偲んで

英先生急逝の報を受けたのは、ワシントンであった。ジョージ・ワシントン大学で、「日本の外交」「国際関係の中の東アジア」を集中講義するため訪れていたのである。国内であればどんな無理をしてもとんで帰り、お通夜・告別式に参列したのに、ワシントンとあってはそれもかなわず、令夫人への弔電、ご子息への電話で哀悼の意を表するしかなかったことは、今日でも心苦しく思っている。

英先生との出会いは、大学四年の夏、昭和三三年に始まる。当時、林烈助教授の議会政治のゼミに所属していたのだが、就職活動の時期を前にして、英先生に大学院に進学し、大学に残らないかとのお勧めをいただいたのである。お宅に伺い、私の成績、家庭環境、外交史という学問の性格、将来のこと、延々二時間にわたってお話しいただいた。帰宅して母に相談すると、大賛成してくれた。父は、伝染病研究所で結核を研究対象とする医者であった。医学博士の学位をとり、これからという時に自分が研究対象としていた結核に侵され、母と

二歳になった私を残して亡くなった。以後母は書道の師範をしながら、家事は祖母にまかせ、方々に出張稽古に行ったり、自宅で書道教室を開くなどして私を育ててくれた。早く社会に出、月給を得て母を楽にしたいという気持ちもあったが、母は専門こそ違え父と同じ研究者への道が開けたことを心から喜んでくれ、大学院進学が決った。就職部には「就職希望せず」の届けを出し、九月に大学院を受験、幸い合格し修士課程、さらに博士課程へと進むことになった。阿部光蔵氏（後に武蔵工業大学教授）、松本三郎氏（現防衛大学校校長）という二人の兄弟子にも恵まれ、英先生のご指導の下、着々と研究を進めていった。

学会へのデビューについても、英先生はご考慮下さった。当時日本国際政治学会の下部組織に日本外交史研究会があり、そこで修士論文に書いた「辛亥革命と日本の対応」の発表の機会を与えていただいた。以後、英先生とは兄弟弟子の関係にあたる石川忠雄教授（後に塾長）のお世話により、コロンビア大学に留学、アメリカからの帰途、台湾に立ち寄り英先生のかつての教え子、台湾財界で活躍しておられた林福耀氏ご一家のお世話になったことも忘れられない。

帰国後法学部副手としてスタート。助手時代の想い出は、英先生の還暦をお祝いする記念論文集作成のお手伝いをしたことであった。東大名誉教授で日本国際政治学会の理事長であられた神川彦松先生のご自宅に伺い、口述筆記を経験、翌日きれいに清書してお届けしたり、同じく学会大長老の田村幸策先生のお宅に原稿をとりに参上したり、その間両先生から学問に対する姿勢などをご教授いただき、得難い経験であった。

この後先生のお手伝いは、英ゼミの三年生を相手に、レジュメを作らせ報告をさせたり、先生が会長をしておられた慶應書道会の顧問として、先生の代わりに夏の合宿に参加、午前四時に起きて朝露で墨をすり書を書く暁天の書にお付合いし、その真剣な姿勢に驚いたこともあった。

英先生の特徴は、何といってもその雄弁にあった。特に学生相手の授業・座談ではその特徴をいかんなく発揮され「カレーライスにソースをかけて食っちゃいかんよ」に始まり、人生訓、若き日の想い出、テーブルマナー等々について、学生を指導された。現在ふと、英先生そっくりの口調で学生に注意している自分に気がつきがく然とすることがある。

先生が亡くなられてしばらくしてから、ご遺族から慶應義塾法学部へ寄付がよせられた。先生を偲ぶいい企画はないか

と考えた末、法学部が今年から設置する総合講座にご意思を生かすことにした。戦後五〇年、激動する世界情勢の中で、日本はいくつかの外交上の選択を行ってきたが、そうした日本外交の選択について、そのテーマを専門に研究し学会の第一線で活躍する研究者を招き、私の司会により講義と質疑応答を行うことにしたのである。講座のタイトルは「戦後世界と日本」、予定しているテーマと講師は次のようである。

「戦後外交と終戦構想」(波多野澄雄筑波大学助教授)、「占領と追放」(増田弘東洋英和女学院大学教授)、「新中国と日本――日中貿易の再開」(波多野勝常磐大学教授)、「日ソ国交回復」(田中孝彦一橋大学助教授)「日米安保改定」(坂元一哉大阪大学助教授)、「日韓国交正常化」(李鍾元東北大学助教授)、「沖縄返還」(河野康子法政大学教授)、「日中国交回復」(別枝行夫成蹊大学講師)、「石油ショックと日本外交」(木村昌人東洋英和女学院大学助教授)、「日米経済摩擦」(草野厚慶應義塾大学総合政策学部教授)、「日本と東南アジア」(添谷芳秀慶應義塾大学法学部教授)、「日本と国連」(田所昌幸姫路獨協大学助教授)、「日本とヨーロッパ」(小久保康之静岡県立大学講師)。

戦後の外交について、英先生は専門とはされておられなかったが、おそらく「わしの意思が生きたね」とあの世で喜んで下さると思う。

改めてご冥福をお祈りしたい。

法学部教授　池井　優

英 修道 教授 略歴

明治三五年　一月一七日　東京市に出生
大正一五年　三月　慶應義塾大学法学部政治学科卒業
昭和　三年　四月　慶應義塾大学法学部助手
昭和　九年　四月　同大学法学部助教授
昭和一二年一〇月　同大学法学部教授
昭和二〇年　九月　法学博士
昭和二二年一二月　（財）日本国際連合協会理事（四四年七月より顧問）
昭和二三年　四月　（財）国際法学会常務理事
昭和二八年　五月　（財）アジア政経学会常務理事
　九月～二九年三月　慶應義塾海外留学生として欧州見学
昭和三〇年　六月　（財）日本ユニセフ協会常務理事
昭和三一年一二月　（財）日本国際政治学会理事（四三年一〇月より理事長）
昭和三四年度～四四年度　外務公務員採用上級試験委員
昭和三七年　六月　文部省学術奨励審議会専門委員
昭和三九年　一月　バンコクにおけるユニセフ国際会議に日本政府代表顧問として出席
昭和四三年　四月　文部省大学設置審議会専門委員
昭和四四年　三月　慶應義塾大学退職

昭和四四年　四月　慶應義塾大学名誉教授・東横学園女子短期大学学長
昭和五〇年一一月　勲三等旭日中綬章
昭和六一年　七月　東横学園女子短期大学学長退職
昭和六一年　八月　学校法人五島育英会名誉理事
昭和六一年一〇月　東横学園女子短期大学名誉教授
平成　六年　九月　御逝去